

ゲッセマネの苦しみ

ルカ福音書22:39-46
(新改訳2017訳)

22:39 それからイエスは出て行き、いつものようにオリブ山に行かれた。弟子たちもイエスに従った。
 22:40 いつもの場所に来ると、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われた。
 22:41 そして、ご自分は弟子たちから離れて、石を投げて届くほどのところに行き、ひざまずいて祈られた。
 22:42 「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」
 22:43 [すると、御使いが天から現れて、イエスをカづけた。
 22:44 イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。]
 22:45 イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに行きご覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。
 22:46 そこで、彼らに言われた。「どうして眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 「誘惑に陥らないように祈っていなさい」の御言葉で、弟子たちにはどんな誘惑がありましたか。
- (2) イエスがゲッセマネの園で苦しまれたことは、贖いのみわざの一部ですか。
- (3) 「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください」と、なぜ祈ったのですか。

【解説】

(1) ゲッセマネの園に行く

《それからイエスは出て行き、いつものようにオリブ山に行かれた。弟子たちもイエスに従った。》

イエスは最後の晩餐を弟子たちと共にとられ、そこでイスカリオテのユダの裏切りについて述べられ、また弟子たちが散らされること、ふるわれることについてお話しになり、シモンとのやりとりがあった。

そして、イエスは弟子たちを引き連れてエルサレムの町の門を出て、谷に流れる川を渡って、向こう側、すなわちオリブ山に入られた。そこにゲッセマネの園がある。ゲッセマネの園は《オリブ山》の西側のふもとにあった。

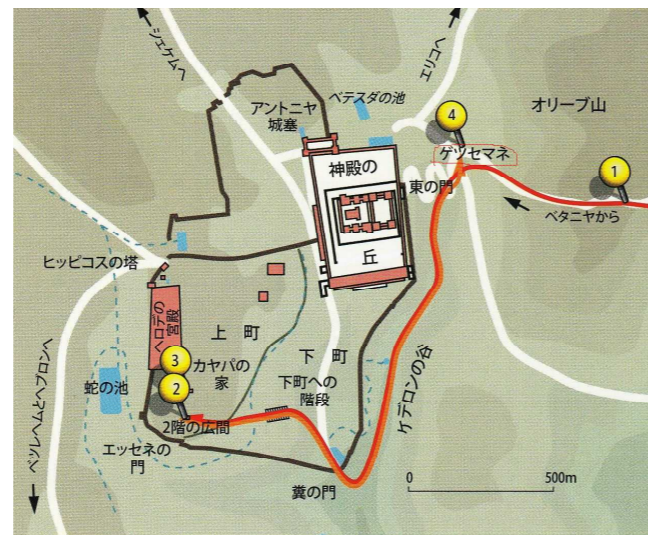
イエスは祈るためによくそこに行かれた。ユダも含め、《弟子たち》はもちろんそのことを知っていた。ゲッセマネというのは、油搾り、あるいは油搾りの大きな桶を意味する言葉である。ゲッセマネの園は、オリーブ油を取るオリーブの木が茂っている園である。

時は真夜中、多分満月か、あるいは満月に近い月が照り輝いている夜であったかもしれない。月の明かりの中をオリブ山にわけ入り、このゲッセマネの園に入られたと考えられる。

(2) 誘惑に陥らないように祈っていなさい

《いつもの場所に来ると、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われた。》

そこに着くやいなや、主は弟子たちに、《誘惑に陥らないように祈っていなさい》と注意をお与えになった。敵が迫って来た時、弟子たちは主を見捨てて逃げてしまったが、彼らがその経験した《誘惑》のことを主は心に浮かべておられたのかもしれない。



(3) この杯をわたしから取り去ってください

《そして、ご自分は弟子たちから離れて、石を投げて届くほどのところに行き、ひざまずいて祈られた。
 「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。》

イエスは弟子たちを残して園の奥の方へ入って行き、そこでひとりで《祈られた》。主の祈りは、「もし御父が拒絶されるのでないなら、この杯がわたしから消え去るように」というものだった。

《しかし》、主はご自分の思いではなく、神の《みこころ》がなされることを望んでおられた。この祈りは、「もしわたしが十字架にかかる以外に、罪人たちを救う方法が何かほかにあるなら、それを示してほしい」という意味に解釈することができる。しかし、天は静まり返っていた。ほかに道はなかったからである。

イエスがゲッセマネの園で苦しまれたことは、贖いのみわざの一部ではない。贖いのみわざは、主が十字架にかかっておられたあの暗やみの3時間のうちに成し遂げられたのである。

しかし、主はカルバリを見越してゲッセマネの園でひとときを過ごされた。私たちの罪をその身に負うことを考えたがために、主イエスは非常に激しい苦しみを経験された。

《この杯》は、イエス以外のだれも飲むことのできない杯である。その中に盛られているものは何か。全人類の罪である。罪に対する神の刑罰、怒りである。この杯を飲むということは、この神の審判を一身に受けるということである。的確な審判を受け、神の怒りのもとに滅ぼされることである。罪なきイエスの前に差し出されているこの杯は、すべての人間が犯した罪という罪が、罪に対する神の刑罰が、よく混ぜ合わされている杯である。神の怒りによって泡立っている恐ろしい杯である。誰がこれを飲むことを躊躇しない者があろう。

(4) 苦しみもだえて…祈られた

《[すると、御使いが天から現れて、イエスをカづけた。イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。]》

御使いが天から現れて、イエスをカづけた。ということは、イエスがここでこの杯を受けか受けないか、これは全人類の運命を決することであり、同時に、天にあるもの全部あげてこれに参加する出来事であった。これは神の人類救済の一大決戦であった。

ここでイエスがこの杯を避けたら、神がイエスによって成し遂げようとした人類救済のわざは空しくなる。悪魔は勝ち誇るものとなる。それこそ全天をあげて、このイエスの戦いが展開されていった。

主は産みの苦しみを味わうかのように《苦しみもだえ》られた。また、《汗が血のしずくのように》なったことを記録しているのはルカだけである。

《汗が血のしずくのように地に落ちた》。イエスの祈りは苦しみもだえ、激しくなっていた。そういう苦しい時、必死の時、人間は体から脂汗を流す。イエスの体はこの脂汗でまみれた。そしてそれが血のしずくのように、ポタリポタリと地に落ちた。イエスの苦闘が絶頂に達している姿である。



(5) どうして眠っているのか

《イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに行きご覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。そこで、彼らに言われた。「どうして眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい。》
 イエスが《弟子たちのところ》に戻られた時、彼らは《眠り込んでしまっていた》。無関心だったからではなく、悲しみのあまり疲れ切っていたからである。

主はもう一度彼らに《起きて……祈っていなさい》と言われた。重大な局面を迎えようとしていたし、彼らは当局者たちの前で主を否むよう誘惑されることになるからである。